

哀 辞

妹尾俊之先生は、平成27年9月28日に病のため61歳で逝去されました。先生が体調を崩され、やむを得ず大学を休職されて、わずか3か月のことでした。時は流れて、先生のご逝去から今年をもって三回忌を迎えることになります。

妹尾先生は昭和52年3月に関西学院大学経済学部をご卒業後、30年以上にわたり広告会社に勤務され、主にマーケティング局などで実務家として活躍されました。その間に執筆された論文「大阪から発信する《誘惑》の広告展開」は、平成10年の大阪広告業協会（現・大阪アドバタイジングエージェンシーズ協会）の懸賞論文事業において金賞を受賞されることとなります。この受賞こそが、広告研究の意義と面白さに開眼する転機となったと語っておられました。また、先生は、広告会社在籍中に『大阪ブランド・ルネッサンスー都市再生戦略の試みー』（陶山計介先生との共著、ミネルヴァ書房、平成18年）をはじめ、多くの優れた研究業績を残されました。その後、縁あって平成20年4月に近畿大学経営学部教授として教鞭をとられ、広告論、ブランド論などの講義科目を担当されました。実際の広告映像を紹介しながら、実務経験に裏打ちされた最先端の講義内容につきましては、学生にとってきわめて魅力的なものであり、いわば経営学部の“看板講義”の一つとしてあげることができるものでありました。

学界に転身されて後、妹尾先生は平成22年10月には日本広告学会常任理事・同 関西部会運営委員長に就任され、ご自身の研究の進展に加えて学会運営の側面からも日本の広告研究活動を力強く牽引されました。とりわけ、平成23年11月に本学で開催された日本広告学会第42回全国大会が成功裏に終わりましたのは、ひとえに大会運営委員長であった先生のご尽力の賜物といえます。また、平成24年10月から平成26年9月までの間、近畿大学経営学部

において、商学科長という要職に就かれ、カリキュラムの改善など学部運営にも多大なる貢献をなされました。

妹尾先生のご研究の中心的課題は広告クリエイティブの理論化にありました。一般に広告クリエイティブには① what to say, ② how to say, ③ tone & manner の3つの戦略要素があるとされますが、そのうち①に関しては、妹尾先生が広告会社在籍中に小林保彦先生等とともに精力的に取り組まれたアカウント・プランニングに関する研究において、その結実が見られます。また②と③に関しては、単著『広告プランニング—レトリック理論による実践アプローチ—』（中央経済社、平成23年）において、その初期の成果が取りまとめられているほか、近年では物語論の援用にも大きな可能性を見出しておられました。

温厚で誠実なお人柄から学生に大変慕われたのが妹尾先生でした。先生のもとにはいつも多くの学生が集っていたことが、今もなお目に浮かんで参ります。妹尾ゼミでは、マンダムや月桂冠など関西主要企業との協業事業「広告企画プレゼンテーション大会」が毎年実施されていました。これは、企業側の提示する具体的なテーマ・課題に対して学生が広告コミュニケーション・プランを提言するというものであり、学生を主体的な学修に導く PBL (Project-Based Learning, 課題解決型学習) の先駆的な取り組みとして注目に値するものといえます。先生の研究室には、歴代のゼミの集合写真が所狭しと飾られていました。そこに写る先生とゼミ生たちの笑顔は、先生の温かいお人柄と妹尾ゼミの充実した活動を物語るものでございました。

教育・研究活動の他に、妹尾先生は、ペンネームを西秋生とされ、文筆活動を行われておられました。それは、先生が亡くなられた後に、ご家族の手によって刊行された『ハイカラ神戸幻視行 紀行篇 夢の名残り』（平成28年9月）にみることができます。その書を繙くと、「序章 夢の街へ、街の夢を訪ねて」のなかで、ハイカラモダニズムの時代をとり上げ、『『モダニズム』とは、伝統から脱却して近代化を目指す思想とその実践であり、藝術と生活文化を両輪の舞台として、1920年代に開花した。これは神戸だけのことでは

なく、日本全国、さらには全世界的に及ぶ事象であったが、しかしその中にあって神戸モダニズムは、帝都東京のモダニズムよりも、当時は人口も経済力も日本一であった大大阪モダニズムよりも、ひとときわ燦然とした輝きを放った。それはもちろん〈ハイカラ〉の効用に他ならない。」(8頁)と記され、「私もまた、戦前の神戸を包み込んだハイカラモダニズムに魅せられ、今から70年ないし90年前に成った藝術や当時の時代背景に取った作品に深く親しむうちに、その現況を知りたくなくて街へ出ることが多くなり、かつ熱が籠ってきた。」(19頁)とされています。この書の「異人館の街 山手雑居地(北野町・山本通)」、「繁華街の古層 三宮界限」、「夢のミクロコスモス 阪神間」等のなかに、堀辰雄、谷崎潤一郎等の描く世界を取り入れながら、過ぎ去りし過去の神戸と現在の神戸に対する熱い想いが語られ、先生のみずみずしい感性を読みとることができます。神戸モダニズムについて、こよなく酒を愛された先生とお話できる機会を失い、寂寥の感を覚えるものでございます。私たちは、先生によって築かれた良きものを継承し、今後の本学部の発展の礎と致したいと存じます。

ここに、先生の三回忌を迎えるにあたって追悼記念論文集を刊行し、先生の教育と研究活動、社会に対するご貢献を偲び、讃えますとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

経営学部長

山 口 忠 昭